

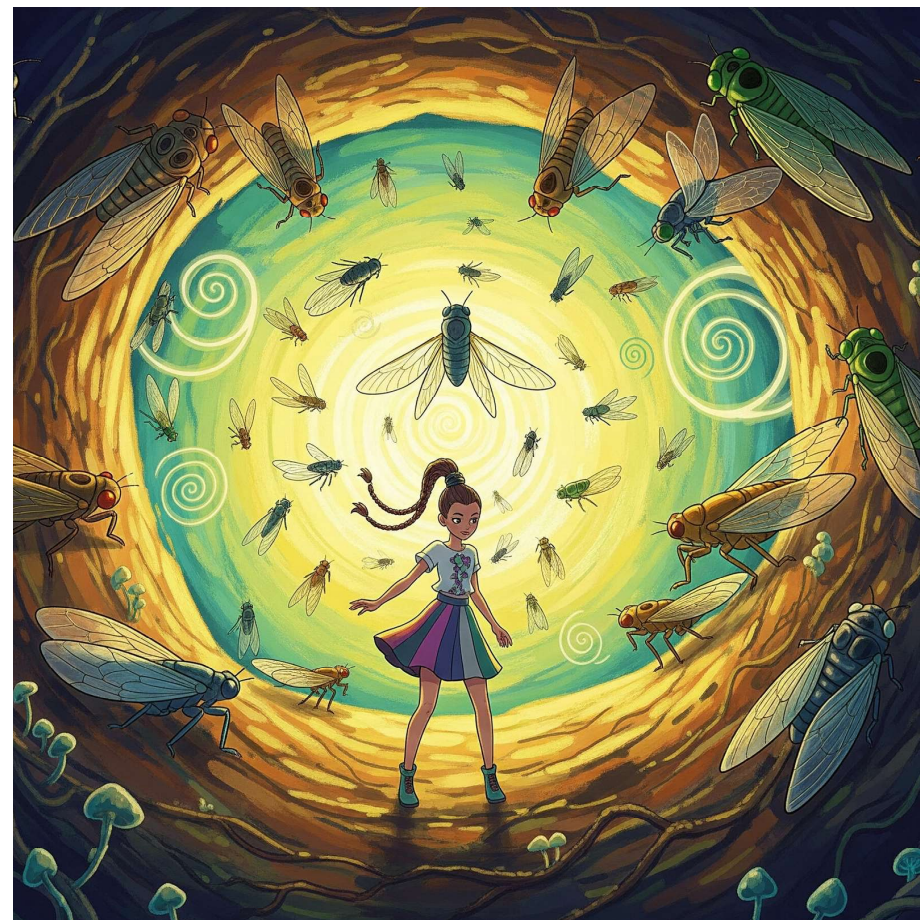


作：秋優音羽





むかしむかし、鹿児島県の錦江町に、おとはという13歳の女の子がいました。おとはは、おしゃれな服を着て、いつも元気いっぱいです。おともだちと遊ぶのが大好きで、特に、夏になると「ミンミンミンミンミン！」と鳴くミンミンゼミが、世界で一番好きでした。



ある暑い日の午後、おとははいつものように、町外れにある大きなクスノキの下で、ミンミンゼミの声に耳をすませていました。すると、他のミンミンゼミとはちがう、ガラスがぶつかるような、きれいな音が聞こえてきました。音のする方を見ると、透明な羽を持つ、まぶしいほどに光るセミがいたのです。そのセミは、おとはの目の前をフワリと飛び、クスノキの根元にある小さな洞穴へと消えていきました。おとはは、ワクワクしながら、そのあとを追いかけてきました。



洞穴の中は、まるで蝉たちのコンサート会場のようなでした。たくさんの蝉たちが鳴いていて、その音のまんなに、さっきの透明なセミがいました。おとはが近づくと、透明なセミはまた飛び立ち、さらに奥へ進んでいきました。おとはがそのあとを追っていくと、足元にキラキラと光るものが落ちていました。それは、透明な石がついた、銀色の指輪でした。おとはが指輪をはめると、指輪はまぶしい光を放ち、おとはの体を包み込みました。



次に目を開けると、そこは見たこともない森でした。木は空高く、花はキラキラと光っていました。そして、おとはが一番びっくりしたのは、人間と同じくらいの大きさのツクツクボウシが飛んできたことです。ツクツクボウシは、おとはが持っている指輪を見て、「あなたは、この『鳴の国』を救うために選ばれた人ですね」と言いました。おとはは、ツクツクボウシに案内され、水晶でできた、とてもきれいなお城へ行きました。



お城の王様は、おとはが最初に出会った、透明な羽を持つミンミンゼミでした。王様は、おとはに言いました。「この国は今、光を奪われて、みんなの声が消えかけているのです。光を奪っているのは、声を持たない『闇の影』という恐ろしい存在です。その指輪だけが、光と声を取り戻すことができるのです」
おとはは、大好きミンミンゼミたちの国がなくなってしまうと知り、とても悲しくなりました。



おとはは王様に「私をこの国に住まわせてください！みんなの声と光を、私が取り戻します！」と伝え、この国で暮らすことを決めました。まず、おとはは森へ行き、光を失い、弱ってしまったミンミンゼミたちを見つけました。おとはが指輪の光を放つと、ミンミンゼミたちは元気を取り戻し、力いっぱい鳴き始めました。おとはは、ミンミンゼミたち、そしてヒグラシ、アブラゼミ、クマゼミたちを助けて仲間を増やし、みんなで「闇の影」を探す旅に出ました。



ついに、おとはと蝉たちは、闇の影と向き合いました。闇の影は、蝉たちの鳴き声をすべて吸い込み、おとはの指輪の光まで奪おうとしました。絶体絶命のそのとき、おとはは叫びました。

「みんなの声は、私一人じゃない！みんなの心と、私の心が一つになった光なんだ！」

おとはがそう叫ぶと、指輪はまぶしい光を放ちました。その光は、闇の影を包み込み、溶かしました。



闇の影が消えた場所からは、虹色の光の粒が空へ舞い上がり、美しい光の雨となって世界中に降り注ぎました。

こうして、おとはの力で、鳴の国は光と声を取り戻しました。おとはは、この国の「光の守護者」として、これからも大好きな蝉たちと共に、この平和な世界で暮らしていくのでした。